

## 働く姿を見て

岡山県・岡山県立玉島高等学校 2年 赤野 早菜江

「働く」ということを今まで本気で考えてなどいなかったということに気がついたのは、父が働く姿を初めて見たときだった。

父は建築士になることを夢みて大学に進学し、私が生まれたときには建築士として働き毎日1時間かけて会社に行っていた。父は土曜も日曜も関係なく毎日毎日働いていた。その上、父は私がまだ眠っている朝早くに家を出て会社に向かい、私がもう眠ってしまった夜遅くに家に帰ってくるのが普通だった。そのため父の顔を何日か見ないまま過ごす日もあった。まだ幼かった私は寂しささえ感じていた。父が家でゆっくりしている姿など、ほとんど見たことがなかった。もちろん父が働いている姿など全然見たこともなかったし、想像すらできなかった。父の職業は建築士。私が知っていたことは、ただそれだけだった。

ある日、突然母に、「父さん、独立して会社することになったから。」と告げられた。はっきり言って「独立する」という意味を私はその頃理解できていなかったが、何かすごいことをするんだということは、なんとなく感じていた。父が自ら会社を経営するようになり、母も父の会社で働くことになった。そんな父と母を私は応援していた。

しかし、父が会社を経営しだしてから、忙しい日々が続き、父と母が家に帰ってくるの

も遅くなり、晩ごはんを兄弟三人だけで食べることも珍しくなくなっていた。最初は父と母を応援していたはずの私だったが、家や家族のことを後回しにするようになった父と母に苛立ちを感じていたこともあった。今思えば、このときの父と母は、やっと軌道に乗りはじめた会社を支えるのに一生懸命だったのだろう。そしてその頑張り是我们家族のためであることに私は気づいていなかった。

私が中学3年生になった頃、私たち家族は新しく家を建て、そこに引っ越すことが決まった。もちろん設計するのは建築士である父である。その日から私たち家族は新築に夢をふくらまし、こんな部屋にしてほしいと希望があるごとに父に頼んでいた。しかし私たちが希望するようなことは大まかで具体性のないようなものばかりだった。父だけは家族や自分の希望を取り入れながらも現実を見据えていた。それは家が完成してから分かったことだが、完成した家は階段以外は段差一つなく、また木製の壁に包まれた暖かさ溢れる作りだったのだ。

まだ何もないただの敷地に、だんだんと家が建ち完成していく様子を私は初めて見た。それと同時に父が働く姿を初めて間近で見る事となった。父の職業は建築士、家の設計をする仕事、と思っていた私の目に飛び込んできたのは、大工と同じように働く父の姿だった。今までと同じように仕事をしながら、

仕事が終わってから寝るまでの時間を父は、私たち家族の新しい家を作る時間に費やすようになった。夜遅くに、たった一人、ライト一つで毎日のように家を作ることに励んでいた。暑い日には汗をダラダラと流しながらも作業を続けていた。それが初めて見る「父の働く姿」だった。その姿からは、父の仕事に対する思いや誇りが伝わってきたような気がした。父は、この仕事が本当に大好きなんだと心の底から思った。

そんな父の姿を目の当たりにして私の仕事に対する、働くことに対する考え方が変わったように思う。自分のために働く、誰かのために働く、それは人それぞれだと思う。働くことに関して私が一番思ったのは、その仕事に自信と誇りを持つということだ。父は、ごはんを食べている途中、急に、「やっぱ、ええ家じゃなあ。」と言ったりすることがある。そんな言葉を言うことができるのも、自信があってこそだと私は思った。

私たち家族の新しい家ができて、もうすぐ1年。私は、この家が大好きだ。父が思いを

込めて作ったこの家が大好きだ。父の職業「建築士」は人に夢を与えていると思った。家が変わると住む環境も大きく変わる。そうすると気持ちや考え方も変わってくる。父の職業には、そんな力があると感じた。

父の働く姿を見てから、私の中で「働く」ということに関する考え方が変わり、そして父の職業「建築士」に興味を持つようにさえていた。父の姿を見ていると、働くということは、やっぱり大変そうだと感じることもある。忙しい毎日を送っている父には疲労もたまっているだろうと思う。しかし、それでも弱音をはかずに毎日毎日働き続ける父はやっぱりこの仕事が好きなのだろうと思う。若い頃から夢みて目指してきた職業に就いた今、父には仕事の大変さより充実感の方が大きいのだと思う。だから私も、そんな充実感を感じることができるような職業に就き働きたいと思っている。働くということは、直接的であれ間接的であれ、どこかで人の役に立っている。だからこそ働いた自分自身は、その職業に誇りを持つことができるのだと思う。